

産業文化の旅 第五回

石見銀山（島根県大田市）

武田 竜弥

島根県のほぼ中央、旧石見国の東端に程近い山中に、わが国を代表する鉱山遺跡、石見銀山遺跡がある。石見銀山が開かれたのは、一六世紀初頭のこと。江戸時代に成立した『銀山旧記』によれば、一五二六年、博多の商人神屋寿禎が出雲の鷲銅山の銅山主三島清右衛門らと仙ノ山（銀峯山）に登り、銀の採掘に着手したのが、その始まりとされる。当時石見は、周防・山口に根拠を置く大内氏の支配下にあった。大内氏は筑前の守護も兼ね、日明貿易を管掌していた。博多の商人が石見銀山の開発にかかわることになったのも、こうした背景があつてのことである。

開発当初、石見の銀は鉱石のまま博多経由で朝鮮半島に送られ、製錬されていた。しかし選別の手間や輸送上の効率の悪さなどから、寿禎は一五三三年に宗丹、慶寿という二人の技

術者を招き、現地での製鍊を開始した『銀山旧記』。このとき導入されたのが、灰の上で銀と鉛を吹き分ける「灰吹法」^{はいふきほう}という製鍊方法である。

近世の銀製鍊は大きく四つの工程からなる。まず、掘り出された鉱石を細かく砕いて水にさらし、比重の差を利用して銀の含まれる鉱石のみを取り出す。これを「鍊拵」^{くわんしゅう}という。次に、取り出された鉱石と鉛を炉の中に入れて溶かし、銀と鉛の合金を作る。この工程を「素吹」^{ぶき}、出来上がった合金を「貴鉛」^{きえん}という。貴鉛を灰の上で溶かすと、酸化した鉛が灰の中に染み込み、灰の上には銀のみが残る。これが「灰吹」である。最後は灰吹で取り出した銀の純度を高める工程で、「清吹」^{きよぶき}と呼ばれる。

石見銀山に導入された灰吹法は、その後生野（但馬）や鶴子^{つるし}（佐渡）など全国の銀山に伝えられ、日本の産銀量を飛躍的に増大させた。折から中国（明）では、税の銀納化（一条鞭法）が進められ、銀に対する需要が急増していた。また大航海時代の最中、東アジアに進出したポルトガル人も、中国商人との取引のため銀を欲していた。こうして一六世紀の半ば以降、石見銀をはじめとする大量の日本銀が輸出されるようになった。最盛期の一七世紀初頭には、その輸出货量は年間二〇〇^トにも達し、当時の世界の産銀量のおよそ三分の一を占めたといわれている。一五四九年に來日したフランシスコ・ザビエルも、同僚に宛てた書簡の中



沖泊浦

で日本を「銀の島」と紹介している。

戦国大名にとって銀山は、文字通り「宝の山」に他ならなかった。石見銀山では、大内氏の没落後、尼子氏と毛利氏との間で激しい争奪戦が行われ、一五六二年に毛利氏の支配が確立した。毛利氏は銀山の外港として温泉津・沖泊を整備し、石見銀の生産・流通を大きく発展させた。

温泉津から積み出された石見銀は、毛利氏の貿易港であった赤間ヶ関（下関）に運ばれ、国内では産出し
ない硝石（火薬の原料）の購入などに充てられた。

一六〇〇年、関ヶ原の戦いの結果、石見銀山は徳川氏の直轄地（天領）となった。徳川家康は大久保長安を初代奉行に任じ、銀山の支配に当たらせた。長安は山師（鉱山経営者）への管理を強化するとともに、横相（水平坑道）による新たな間歩（まが）（坑道）の開発や大森地区の整備などに力を注いだ。石見銀山はこの頃に最盛期を迎え、その産銀量は年間一万貫（約三七・五ト）にも及んだ。

しかし開山から一〇〇年、一六二〇年代後半になると、

さしもの石見銀山も良鉱が乏しくなり、産銀量が大きく低下していった。一六七五年には奉行統治が代官統治に格下げ、幕末の頃の産銀量は最盛期の1%にも満たなかった。

明治維新後、石見銀山は民間に払い下げとなった。一八九五年には大阪の藤田組（現・DOWAホールディングス）が旧銀山柵内の清水谷に近代的な製錬所を建設し、再開発を試みた。しかし期待した成果は上がらず、製錬所はわずか一年半程で操業停止となった。その後も藤田組は柑子谷こうじだにを拠点に銅生産を行ったが、第一次世界大戦後の銅相場の下落で採算が合わなくなり、一九二三年、石見銀山は休山するに至った。

鉱山遺跡としての石見銀山の特徴は、近世の鉱山の姿を伝える遺跡群がまとまった形で残されている点にある。豊かな自然に囲まれた銀山には九〇〇以上の坑道があり、かつて鉱山町であった大森地区には往時を彷彿させる町並みが保存されている。また周囲には銀や生活物資を運んだ二つの街道と積み出し港、戦国時代に築かれた城跡などがあり、一帯があたかも歴史博物館のような趣となっている。石見銀山そのものの歴史的価値と自然と調和した遺跡群の織り成す景観が評価されて、二〇〇七年、石見銀山遺跡はユネスコの世界文化遺産に登録された。登録名は「石見銀山遺跡とその文化的景観」である。

石見銀山を見学する際、拠点となるのが、この世界遺産登録を機に開設された石見銀山世



龍源寺間歩

界遺産センターである。アクセスはＪＲ大田市駅から路線バスでおよそ三〇分。館内では石見銀山の歴史や採掘・製錬技術、鉦山町の暮らしなどがパネルや模型によって詳しく紹介されている。歴史遺産の集中する銀山地区や大森地区からは少し離れているが、両地区には環境保全のため駐車場がほとんど用意されていないので、車で訪れる場合はこの駐車場を利用するのが便利である。

世界遺産センターから観光案内所のある石見銀山公園までは、バスで五分程である。五百羅漢（世界遺産）で有名な羅漢寺もすぐ近くにある。この銀山公園の南側が銀山地区、北側が大森地区で、両者を貫くように旧道が通じている。

銀山公園から龍源寺間歩までのおよそ二・三キロメートルが、銀山地区の観光の中心である。旧道沿いには寺社や精錬所の跡が連なり、近世鉦山の佇まいを伝えている。龍源寺間歩は江戸時代の中頃に開かれた幕府直轄の坑道で、石見銀山の坑道の中で唯一常時公開されているものである。また銀



清水谷製錬所跡

山地区には旧道とは別に遊歩道も整備されているので、往路と復路で別の道を辿ることができる。遊歩道は自然に親しみながら石見の旧跡を巡るコースで、途中には藤田組が建設した清水谷製錬所の遺構がある。

銀山公園の北側、大森地区は、かつての鉾山町である。銀山地区とは打って変わって、こちらの旧道沿いには、江戸から明治にかけて建てられた武家屋敷や商家などが軒を連ねている。その保存状態の良好さから、一九八七年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。大森町ではこの景観を守るため、古い家を修復する際には町から補助金を出すなどして、可能なかぎり元の形状を維持もしく

は復元するよう努めている。

大森地区のほぼ中央に、町並み交流センターがある。建物は一八九〇年建築の旧大森区裁判所で、中では当時の法廷の様子が再現されている。ここから五〇〇メートル程北に行くと、大森代官所跡に出る。表門と門長屋は一八一五年の建築、建物は一九〇二年に建てられた旧通摩^{にま}



大森地区の町並み



町並み交流センター



代官所跡（石見銀山資料館）

郡役所である。現在は、石見銀山資料館として公開されている。展示は銀山関連の古文書や道具類、鉱石標本などで、ガイダンス的な内容の世界遺産センターの展示とは一味違っている。代官所前からは、バスで大田市駅または世界遺産センターに戻ることができる。

日程に余裕のある方には、石見銀の積み出し港であった温泉津に宿泊することをお勧めする。温泉津はその名の通り温泉のある津（港）で、石見銀山の衰退が顕著となった江戸時代

後期以降も北前船や山陰航路の寄港地として賑わった。町には現在も大正時代以前の建物が数多く残されており、レトロな雰囲気の人気を呼んでいる。大田市駅から温泉津までは、山陰本線でおよそ三〇分である。

石見銀山とその周辺では、世界的な産業遺産だけでなく、山も海も温泉も楽しむことができる。コロナウィルスの流行で旅行もままならない状況ではあるが、一度は訪れてみたい場所である。

Trip to the World of Industry and Culture

Part 5

Iwami Ginzan Silver Mine (Ohda)

In the 16th century Japan was called the “island of silver”. At its peak in the early 17th century Japan produced about one-third of the world silver and a huge amount of Japanese silver was exported to China, Korea and Southeast Asia. Iwami Ginzan, which is located in Ohda, almost in the middle of Shimane prefecture, was one of the largest silver mining sites in Japan. It was discovered in the early 16th century and was active for nearly 400 years. Based on its historical value, “Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape” were registered as a UNESCO World Heritage Site in 2007. The visitors to this area cannot only see a lot of valuable industrial heritage such as ruins of mine shafts and smelters, but also get in touch with the culture and life in the old mining town surrounded by the beautiful nature.



武田竜弥 | Tatsuya TAKEDA
名古屋工業大学大学院工学研究科
ドイツ文学・感性社会学
教授